（しろいずみいせき）

城泉遺跡　現地説明会資料

平成30年９月22日（土）
香川県埋蔵文化財センター

【はじめに　～城泉遺跡の調査について～】

香川県埋蔵文化財センターでは、平成30年6月から10月までの期間で、城泉遺跡（しろいずみいせき）の調査を行っています。城泉遺跡は、かねてからその存在が知られている遺跡でしたが、国道11号バイパスの建設に伴い、本格的な発掘調査が行われました。

遺跡は道路をはさんで西側にも広がっており、今回の調査と合わせ、縄文時代～江戸時代の人々の生活の跡が残る複合遺跡です。

今回の調査では、主に弥生時代～古代の遺構（いこう）・遺物（いぶつ）が見つかっています。

特に、古墳時代中期（約1600年前）の集落跡が見つかったことは、大きな成果です。集落は、かつての谷筋に挟まれた微高地（周りより少し高い土地）に竪穴建物が作られ、谷筋の低い土地には、灌漑に利用された可能性のある流路が流れています。

これらの遺構からは、多量の土器・木器などの遺物が見つかっています。

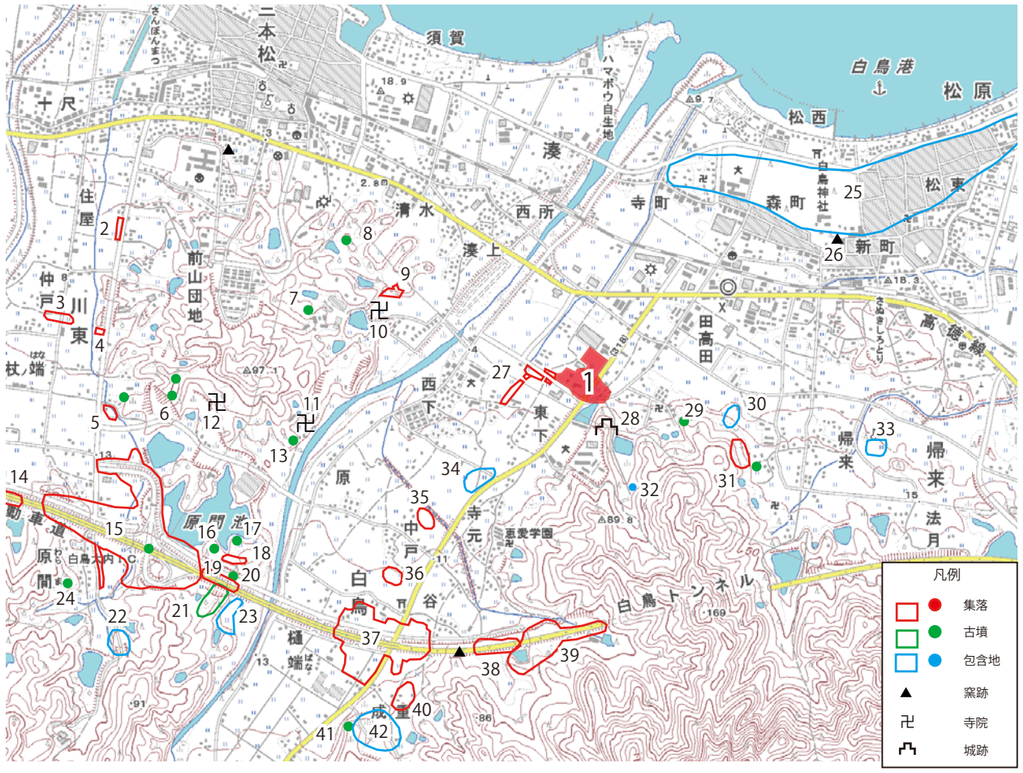
【周辺の遺跡について】

城泉遺跡の周辺には、県指定史跡の白鳥廃寺（古代の寺院跡）を始めとして、道路などの建設に伴う発掘調査により発見された遺跡のように、現在の景色の中では確認できないものも含め、さまざまな時期の遺跡が存在しています。

弥生時代からの集落跡である原間遺跡と成重遺跡では、城泉遺跡と近い時期の集落や、古墳が見つかっています。

近年では、新たに発見された岡前地神社古墳で、石棺が発見されています。

なお、城泉遺跡のすぐ南側の丘陵上には、中世の山城である白鳥城跡が存在しますが、詳細は不明です。



1 城泉遺跡　2 住屋遺跡　3 仲戸遺跡　4 仲戸東遺跡　5 小僧遺跡　6 大日山古墳　7 湊山下古墳　8 岡前地神社古墳　9 山下岡前遺跡　10 白鳥廃寺跡　11 樋端廃寺跡　12 高松廃寺跡　13 北原庵の谷古墳　14 西谷遺跡　15 原間遺跡　16 樋端墳丘墓　17 神越５号墳　18 寺前遺跡　19 樋端遺跡　20 神越古墳　21 神越桃山古墳　22 幸代池西遺跡　23 神越遺跡　24 原間１号墳　25 松原遺跡　26 須崎山窯跡　27 田中遺跡　28 白鳥城跡　29 秋葉神社古墳　30 田高田北遺跡　31 赤坂古墳群　32 田/口池奥遺跡　33 帰来遺跡　34 寺元遺跡　35 藪西遺跡　36 中戸遺跡　37 成重遺跡　38 善門池西遺跡　39 池の奥遺跡　40 成重北遺跡　41 観音谷古墳（四房古墳）　42 四房遺跡

城泉遺跡および周辺の遺跡（国土地理院 1/25000 地形図の一部を改変して使用）

【城泉遺跡周辺の古墳時代集落】

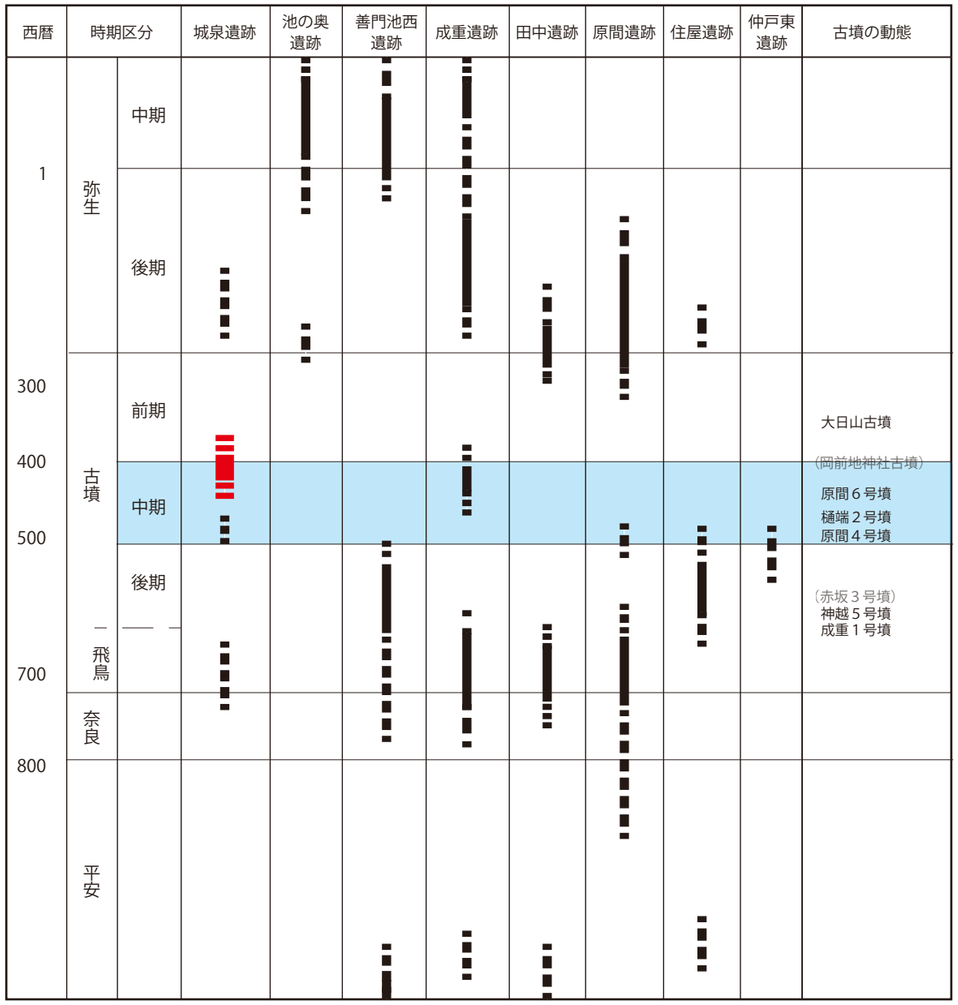
城泉遺跡の位置する旧白鳥町周辺は、弥生時代以降の集落遺跡が多く見つかっています。成重遺跡や原間遺跡などでは、弥生時代には複数の建物をもつ集落が、一定期間営まれていました。

しかし、古墳時代になるとこれらの集落は衰退し、いったん人々の生活の痕跡はなくなります。これは県内の他の地域でも多い現象であり、城泉遺跡は、この『空白期』を埋める集落と言えます。

城泉遺跡の集落は、これまでの調査成果から、東を谷と丘陵、西を湊川と周りの低地や流路に挟まれた、比較的狭い微高地上に位置します。当時の環境では、住む場所としてはあまりよい場所と言えません。

一方周辺をみると、湊川の河口付近は、現在よりも海岸線が内側にあり、遺跡から海までの距離も今より近く、近隣には海を越えて来た人々と交流する集落があっても良いような、栄えた地域であった可能性が高いです。その証拠に、湊川流域及びその周辺は、古墳時代中期の古墳も連綿と築かれ、それらに関わる資料も多い地域です。

城泉の地に集落が構えられた要因には、このような地域勢力の成長が関わっているのかもしれません。



周辺の主要集落遺跡と古墳の動態（括弧付きの古墳は調査中・時期検討中のもの）

【今後の城泉遺跡の発掘調査について】

今年度の城泉遺跡の調査は、10月末まで続きます。今後は、竪穴建物を検出した調査区（10区）の北側を調査する計画です。今後の調査の進展については、埋蔵文化財センターのHPで随時公開していく予定です。

香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024　香川県坂出市府中町南谷5001－4

TEL:0877-48-2191
FAX:0877-48-3249
URL:https://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/

城泉遺跡の調査成果

現在調査中の11区に加え、8月まで調査を行っていた
10区の見所を紹介します。

竪穴建物１では、遺構の中から多量の土師器が出土しました。土師器は古墳時代中期のものを中心とし、割れていない状態の小型丸底壺・高坏がほとんどです。

一方、煮炊きに用いる甕などはそれほど多くありません。また、蛇紋岩製の勾玉も出土しています。

遺物の出土状況から、建物の廃絶後に、土師器を用いた祭祀が行われた可能性も考えられます。

竪穴建物は、一部古いものと新しいものが重なって見つかりました。

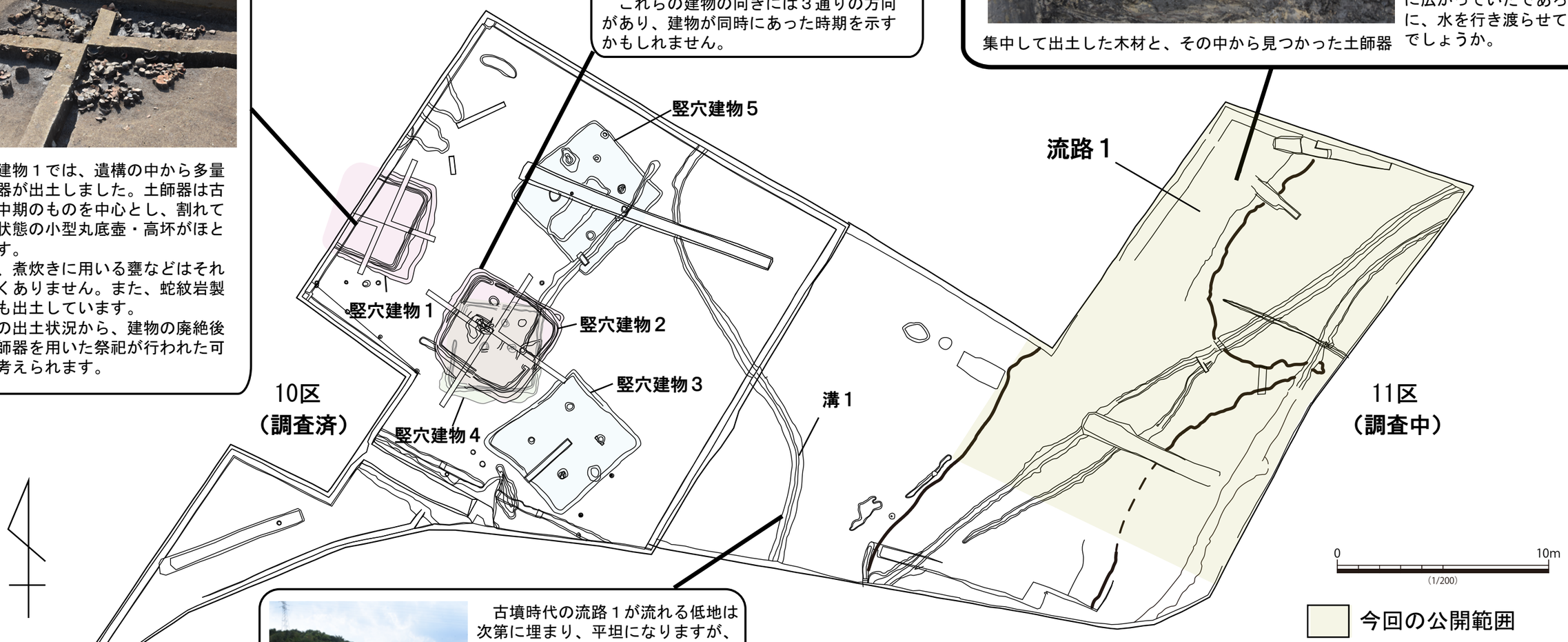
これらの建物の向きには３通りの方向があり、建物が同時にあった時期を示すかもしれません。

集中して出土した木材と、その中から見つかった土師器

調査地の中央には、最大幅約10mの流路１が流れています。この流路の北端には多くの木材・枝・葉が堆積していました。

これらが一地点に集中することから、下流側に井堰のような、水流を調整する構造物が築かれていたと推測できます。

流れをせき止め、より小さな水路へと水をひき、北側のに広がっていたであろう水田に、水を行き渡らせていたのでしょうか。



古墳時代の流路１が流れる低地は次第に埋まり、平坦になりますが、水路として利用された溝が、後の時代にも近い場所に作られます。

現在でも谷を利用して作られたため池からの水路が遺跡の隣に流れていますが、それ以前もこの地は水利と深くかかわる場所だったのでしょう。

←北からみた溝１
久詰池（谷筋）に向かって伸びている

【用語の解説】

竪穴建物…縄文時代から古代まで使用されていた建物の形態。地面に穴を掘り、地表より低い面を床とする建物。
弥生時代には平面形が円形・方形の建物が存在するが、古墳時代からは平面形が方形の建物が中心となる。

井堰……水量を調節したり、水を引いたりするために、川や溝をせき止める施設。江戸時代以前には、杭を並べて打ち、そこに木や竹、枝を組み合わせて構築される例が多い。

蛇紋岩製の勾玉…勾玉は装身具（アクセサリー）としてのほか、祭祀などにも用いられたと考えられる。石や土、ガラスなど様々な素材が用いられるが、今回出土した勾玉は蛇紋岩で作られている。蛇紋岩は、日本列島の各地に分布する岩石（火成岩）で、磨くと鈍い暗緑色に輝く。城泉遺跡の周辺では、徳島県の吉野川流域に分布することが知られている。